

日本語オノマトペのかたち

野村明伸 (@nov0513)

1. はじめに

日本語のオノマトペは、意味的に大きく分けて擬音語と擬態語に分けることができる。擬音語はものや生物がたてる音を、擬態語は物事の様子や動作、感情を表現する。オノマトペの意味は、音象徴という、音声がただの言語記号であることを超えて何らかのイメージを私たちに抱かせる、という性質が関係している。

筆者はこの音象徴について研究しようとしているが、現在使われている日本語のオノマトペは、『日本語オノマトペ辞典』（小野正弘・編（2007））によると3000を超える。この3000を超えるオノマトペを一つ一つ検証していくのは無駄が多すぎるため、検証しやすい数にまとめたいと考えている。

本発表では、日本語オノマトペにおける形態的研究を改めて振り返ることで、今後の研究に役立てたいと考える。

2. 日本語オノマトペのパターン分類

オノマトペのパターン分類についての研究はいくつかあるが、ここでは天沼（1974）と金田一（1978）、そして田守・スコウラップ（1999）の研究について見ていきたい。

2.1 天沼（1974）

天沼（1974）は、拍の数によって以下のようにオノマトペ进行分类している。分類にあたって、一拍の特定の音を表す仮名の代わりに X,Y,Z,W を用い、基本と見られる形に付く長音を「:」、促音を「t」、「リ」を「r」、撥音を「n」のように表す。

表1 天沼（1974）による分類

1 拍のもの	1	X 型	ツ
2 拍のもの	2	XY 型	スイ、ポイ、ペタ、シャン、チン

	3	X t 型	カッ、ギュッ、ゾッ、ペッ
	4	X : 型	ツー、フー
3 拍のもの	5	XY t 型	ガリッ、ダラッ、ニョキッ、ポタッ
	6	XY r 型	ケロリ、ダラリ、パラリ、ピリリ
	7	XY n 型	ガタン、キョトン、バラン、ピョコン
	8	X t X 型	カッカ、キャッキヤ、トット
	9	XY : 型	スイー、フラー
	10	X : Y 型	スーイ、パーン、ビューン
	11	X : t 型	カーッ、キューッ、ポーッ
4 拍のもの	12	XYXY 型	イライラ、ガリガチ、ヒュンヒュン
	13	XYZY 型	アタフタ、ギクシャク、ペチャクチャ
	14	XYXZ 型	キンキラ、ドンドコ
	15	XYZW-1 型	カサコソ、ガタゴト、カラコロ
	16	XYZW-2 型	チョコマカ
	17	XYZW-3 型	ガタピシ
	18	XYZW-4 型	スタコラ
	19	XYZW-5 型	ゴタクサ、ノロクサ、パチクリ
	20	XYZW-6 型	ホンワカ、ワンサカ
	21	XY r t 型	カラリッ、グルリッ、バラリッ
	22	XY r n 型	カラリン、サラリン、パラリン
	23	X t YZ 型	ウッスラ、フックラ
	24	X t Y r 型	ウッカリ、ヒョッコリ、ポッコリ
	25	X t Y n 型	ゴットン、スッテン、ボッタン
	26	X n Y r 型	アングリ、グンニャリ、ノンビリ
	27	XY : r 型	スラーリ、ソローリ
	28	XY : t 型	ジローッ、ドサーッ、ボケーッ
	29	XY : n 型	がらーん、ショボーン、ブラーン
	30	X : Y r 型	フーワリ、ユーラリ
	31	X : Y : 型	ガーガー、ニューニュー、ホーホー
5 拍のもの	32	XYXY 型の末尾に 促音「ッ」、又はは ねる音「ン」を伴っ	カラカラッ、パラパラッ、(XYXY t 型) ガラガラン、コロコロン (XYXY n 型)

		ているもの	
	33	XYXY 型の第1拍と第2拍の間に「ッ」が割り込んだもの、または第1拍の音が長音となったもの	ガッタガタ、ホッカホカ (X t YXY 型) スーイスイ、フーラフラ (X : YXY 型)
	34	XY _n 型のXとYの間に「ッ」を割り込ませ、Yを長音化したもの	ドッカーン、バッターン (X t Y : n 型)
	35	その他のもの	コテンパン、ドンピシャリ
6拍のもの	36	3拍のものが重なったもの	ウツラウツラ {XYZXYZ 型} ノソリノソリ (XY _r XY _r 型) ベロンベロン (XY _n XY _n 型) アップアップ (X t YX t Y 型) ウーロウーロ (X : Y X : Y 型)
	37	3拍の異なった形のものを二つつないだもの	チラリホラリ (XY _r ZY _r 型) ドタンバタン (XY _n ZY _n 型) ガタンゴトン (XY _n ZW _n 型) ヤッサモッサ (X t YZ t Y 型) テンヤワンヤ (X _n YZ _n Y 型)
	38	2拍のものを三つ重ねたもの	カンカンカン (XYXYXY 型) タッタッタッ (X t X t X t 型) キンキラキン (XYXZXY 型) キンコンカン (XYZYWY 型)
	39	4拍+2拍のもの	ガラガラポン、チンチンゴー
	40	その他のもの	アッケラカン、スッデンドー
7拍のもの	41	末尾に促音「ッ」を伴っているもの	キラキラキラッ、バリバリバリッ (XYXYXY t 型)
	42	末尾に「リ」を伴っているもの	クルクルクルリ、チラチラチラリ (XYXYXY _r 型)

	43	末尾に「ン」を伴っているもの	カラカラカラン、コロコロコロン (XYXYXY _n 型)
	44	末尾の一つ前に長音が割り込んでいるもの	カンカンカーン、ポンポンポーン (XYXYX : Y型) タッタッターッ (X t X t X : t型)
	45	その他のもの	ガラガラピシン、シューシューバチン、スッテンコロリ、ノンベンダラリ
8拍のもの	46	異なった4拍のものを2つ結合させたもの	カタカタコトコト、ゴロゴロピカピカ、ワイワイキャーキャー、ズングリムックリ、ガッタンゴットン
	47	同じ4拍のものを2つ重ねたもの	カタコトカタコト、ガラゴロガラゴロ、ノッソリノッソリ

2.2 金田一 (1978)

金田一 (1978) も拍の数で分類を行った。特に1拍と2拍のオノマトペを「語根」としている。

表2 金田一 (1978) による分類

1	一拍語のもの	ふ、つ
2	一拍の語根+「い」「ん」「っ」 引く音のもの	つい、きゃっ、にゅっ、ぽん
3	二拍の語根のもの	がば、にゃお、びた
4	一拍の語根に+「い」「う」 「ん」「っ」のうちのが 二個	ごうん、ぼいん、ぼうっ
5	二拍の語根+「っ」の形のもの	ごろっ、ばさっ、ぽかっ
6	二拍の語根+「ん」のもの	かちん、どきん、ぴよこん
7	二拍の語根+「り」の形のもの	ぐるり、ごろり、ぴかり

8	7の一種「り」でないもの。 古風な語	うらら、しとど、そよろ
9	二拍の語根の中間に、つめ、 はねの入ったもの	ざんぶ、むんず、かっか、きやつきや、はっ し
10	7の形の第一拍と第二拍の 間に、はねる音、つめる音 の入ったもの	あんぐり、ぐんにやり、こんがり、どんぶり あっさり、がっかり、しっかり、しっぽり
11	二拍の語根の繰り返し	からから、きらきら、しゃりしゃり、するす る、とろとろ いそいそ、かちかち、くしゃくしゃ
12	前項に似て類音のものを重 ねるもの	あたふた、からころ、ぺちやくちや、むしゃ くしゃ
13	全く似ていない二拍を重ね たもの	がたびし、ちょこなん。ちょこまか、ぱちく り
14	二拍語+「りん」「りっ」の 形	くるりっ、ころりん
15	五拍のもの	ころりんこ、けろりかん
16	7・8・9の繰り返し	ぐでんぐでん、ごろんごろん、のたりのたり、 ぱっかぱっか
17	16に似てあとのものは、多 少形のちがうもの	しどろもどろ、てんやわんや、のらりくらり
18	その他の六拍のもの	こけこっこう、すっからかん、とんちんかん、 ほうほけきょう

2.3 田守・スコウラップ (1999)

田守・スコウラップ (1999) は、1 モーラまたは2 モーラの基本形を元に分類している。この基本形を「語基」と呼んでいる。ここでは、「C」は子音、「V」は母音を表しており、また「Q」は促音、「N」は撥音、「ri」は「り」を表している。

表3 田守・スコウラップ (1999) による分類

1 モーラを語基に持つもの	1	CV	つ、ふ
	2	a.CVQ b.CVN	かつ、ちゅっ、ふっ、ぺっ かん、にゃん、ばん
	3	CVV	がー、ぎゅー、さー、ざー
	4	a.CVVQ b.CVVN	かーっ、ざーっ、ぱーっ がーん、きゅーん、ぽーん
	5	a.CVQ-CVQ b.CVN-CVN c.CVV-CVV	きやつきやつ ばんばん がーがー
2 モーラを語基にもつもの	6	CVCV	がば、そよ、ひし、ぶい
	7	a. CVCVQ b. CVCVri c. CVCVN	ころっ、ばたっ、ぽきっ ころり、ばたり、ぽきり ころん、ばたん、ぽきん
	8	a. CVQCV b. CVNCV	どっか、すっく、はっし ざんぶ、むんず
	9	a. CVQCVri b. CVNCVri	がっくり、ぼっさり げんなり、にんまり
	10	2 モーラの反復した形態	きらきら、ばたばた、にこにこ、めらめら
	11	a. それぞれの語基の子音は同じだが母音が異なる b. それぞれの語基の第一モーラが異なる	がさごそ、からころ どたばた、ぺちやくちゃ
	12	最初の 2 モーラのうちの第 1 モーラだけが変化して反復した形態	どぎまぎ、ちらほら、のらくら

	13	まったく異なる 2 モーラ同士が組み合わさった形態	がたびし、そそくさ、すたこら、ちょここまか
	14	7b と 7c の形態の反復	ぐさりぐさり、どきりどきり、ばたりばたり ころんころん、どきんどきん、ばたんばたん
	15	11 や 12 の変種	がたんごとん、からんころん、どたんばたん がたりごとり、ちらりほらり、のらりくらり
	16	特殊な形態	こけこっこう、すっからかん、ほうほけきょう

3. 語基とオノマトペ標識

前節で紹介した 3 つの分類の研究は、表記の仕方は異なるが、1 拍または 2 拍の基本的な形が組み合わされてパターン数を増やしているということと、基本形に促音や撥音、長音、「り」音が特殊な音として扱われているということである。

多くの派生形を生み出す基本形のことを、金田一（1987）は「語根」と、田守・スコウラップ（1999）は「語基」と呼んでいる。本発表では、始めから基本形を念頭において分類している田守・スコウラップ（1999）にならって基本形を語基と呼ぶことにする。

この語基、とくに 2 モーラの語基が反復されることで「日本語オノマトペのもっとも一般的な形態」（田守・スコウラップ（1999））が作られる。また、反復の他には語基に促音や撥音、「り」音が付け加えられることでさらに日本語オノマトペはパターンを増やす。これらの語基についてパターンを増やす要素を「オノマトペ標識」（Waida（1984））と呼ぶ。

これらの派生形は無意味にあるのではなく、もとの語基と少しずつ意味に差が出てくる。語基の後ろに付加される促音「っ」は「瞬間性」「スピード感」「急な終わり方」を表し、語中に挿入される促音は「強調」を表す。撥音「ん」は「共鳴」を、「り」は「完了」や「ゆったりした感じ」を表現する。長音は擬音

語においては物理的に長い音を描写し、擬態語では強調となって現れる。語基が反復されると音や動作の反復は繰り返しが表現される。(田守・スコウラップ(1999))

角岡(2007)は、上記に加えて「無声子音の有声化」「硬口蓋音化」「摩擦音／破擦音交替」もオノマトペ標識として考えられると述べている。

音象徴の考察へと進むに当たって、以上述べて来た先行研究のオノマトペの分類とオノマトペ標識は妥当か否か、そして発展させられることがあるとすれば何か、ということを考えていきたい。